



那須野が原博物館
坂本 菜月 学芸員

那須野が原の交通史においても 重要な道路ですー

塩原新道は塩原の発展を支えた重要な道路です。明治17(1884)年には、塩原新道だけでなく陸羽街道(現在の国道4号)も整備されました。こうした交通網の整備によって、塩原へのアクセスが容易となり、東京などの遠方から塩原の風光明媚な景色を求めて多くの人々が訪れるようになりました。

那須野が原博物館では、こうした交通の歴史に関連する資料も常設展示しています。ぜひ見に来てください。



◀大正11(1922)年に電化された塩原電車。開通記念時の電車で、車体が装飾されている



▲現在の三島地区。かつてはこの道路が国道400号になっていた



国道400号は、西那須野地区と塩原地区を抜ける広域幹線道路です。東北自動車道の西那須野塩原インターチェンジや、塩原温泉郷へのアクセス道路にもなっており、栃木県北の観光や産業を支える重要な路線です。広報なすしおばら発行400号となる今号にちなみ、市内を通る国道400号に着目します。

歴史 第1章



三島 通庸(1835~1888)

薩摩国(鹿児島県)で生まれる。旧薩摩藩士で、明治政府の内務官僚として活躍する。幕末において寺田屋事件にかかわり、倒幕運動に参加。維新後は、東京府権参事・教育大丞を始め、酒田県令・山形県令・福島県令を歴任。明治16(1883)年には福島県令のまま栃木県令となる。この間、栗山山隧道(山形県)・会津三方道路の開削など土木建設事業に手腕を発揮し、「土木県令」と称されたが、強引に事業を進めたため反発も大きかった。明治17(1884)年には内務省土木局長に転任、翌年警視総監となるが、明治21(1888)年54歳で死去。

▲明治17(1884)年に撮影された「栃木県新道写真」のうち、三島地区の写真。約140年も前に、現在に通じる幅広い道路が整備されている

市内を通る国道400号の起源は、明治時代に開削された塩原新道までさかのぼります。
山形県令(現在の県知事)や福島県令、栃木県令を歴任した三島通庸は、会津若松を中心に、山形県、新潟県および栃木県の三方向に通じるいわゆる「会津三方道路」を計画します。この計画は、東京以北の産業の振興・経済の進展を図ることが主な目的であったとされています。
その三島通庸が、第3代栃木県令であった明治17(1884)年に塩原新道を開削します。塩原新道とは、現在の三島を起点とし、関谷、塩原(古町)を経由して福島県境の山王峠までを通る道です。
関谷から塩原へ、さらには会津西街道へ通じる道は明治以前からもありましたが、それらは人や馬が通れる程度の小道に過ぎませんでした。「土木県令」とも呼ばれた三島通庸は、旧来の人道(人が通ることができきる道幅)としての道路の概念を一変し、道幅が広く、直線的で高低差の少ない車道としての道路を作り直しました。
現在の国道400号は、約140年前の塩原新道と同一の区間が多く存在し、後世にもつながる三島通庸の先見性を垣間見ることが出来ます。
塩原新道には電車が走っていた
明治19(1886)年には、那須野(明治24(1891)年に西那須野駅と改称)が開業。塩原温泉の玄関口として多くの観光客が訪れるようになりました。
明治45(1912)年には、西那須野駅と塩原温泉を結ぶ観光鉄道として、「塩原軌道」が開通。塩原新道に沿って関谷まで鉄道が敷かれ、蒸気機関車の運行が開始されました。路線は最終的に、塩原口(現在のがま石トンネル付近)まで延長。大正11(1922)年には電化され、塩原電車となりましたが、自動車の発達とともに利用客が減少し、昭和8(1933)年に塩原電車は休止。昭和10(1935)年には廃止となりました。